

インクルーシブ保育のための「あとリエ」の可能性

—エピソード記録からの考察—

植草 一世^[1], 安藤 則夫^[2]

[1] 植草学園大学発達教育学部・植草学園大学美浜幼稚園, [2] 植草学園大学発達教育学部

街ぐるみで子どものための素材活用を実践的に研究しているレッジョ・エミリアを参考して、私たちは、千葉市内にあるM幼稚園において、素材庫（以下、「あとリエ」と記す）作りを行ってきた。その成果を確認するために保育者たちは、「あとリエ」を拠点にした遊びをエピソード記録としてまとめ、園内研修で話し合いを行ってきた。これからの保育の方向性を見いだすために、その記録を分析し考察を行った。その結果「あとリエ」の多様な素材が遊びの刺激剤として子どもに多くの影響を与えていたことがわかった。「多様な素材が活用できる環境作り」をすることで、どの子どもも何かの遊びを着想しやすくなり、主体的に遊ぶための取り組みに発展し、他の子ども巻き込むインクルーシブ保育の土台となることが分かった。

キーワード：素材庫（「あとリエ」）、エピソード記録、園内研修、インクルーシブ保育

1. はじめに

1.1 遊びを中心とした保育とその実践

遊びを中心とした保育が、幼児期の子どもたちの育ちに重要であることは、幼保連携型認定こども園教育・保育要領¹⁾、幼稚園教育要領²⁾、保育所保育指針³⁾においても、「生活や遊びを充実することを通して」の保育を行うこととして示されている。これまでの日本の保育は、倉橋惣三の保育理論を基礎として進められてきたが、とりわけ誘導保育論はその中心概念として保育のあり方に大きな影響を与えている。倉橋はその保育方法について、代表的な著書『幼稚園真諦』⁴⁾ (1934年)の中で、「さながらの生活 - 自由・設備 - 自己充実 - 充実指導 - 誘導 - 教導」とまとめている。「さながらの生活」とは、子どもが「子どもらしく十分に生活できる」ことで、そのためには、子どもが自由な雰囲気をも十分に味わうことができる「自由・設備」を整えていなければならない。子どもは、この「自由・設備」が保障されて初めて、願いや思いが満たされ「自己充実」するのである。倉橋は、子どもが自分の力で「自

己充実」できない場合、子どもを援助する「充実指導」が必要になり、そして子どもの興味に即して子どもの活動を系統づけるのが「誘導」であり「教導」であるとしている。倉橋の誘導保育論は、幼児の子どもらしいありのままの生活を尊重して、「生活を、生活で、生活へ」と導き、自己充実するように誘導することが幼児保育の基本である、という幼児中心主義の保育論である。

本研究幼稚園である千葉市内にあるM幼稚園（以下、M幼稚園と記す）では、倉橋理論の遊びを中心とした幼児期の保育理論に照らし合わせた保育実践を心がけ、その保育を報告^{5) 6) 7)}してきた。しかし、保育者たちは、常に保育確認を怠ると、子どもの育ちの成果（出来る、出来ない）だけに目を奪われがちであると実感している。

1.2 レッジョ・エミリアの創造的リサイクルセンターレミダ (REMIDA) とアトリエ

研究代表者（植草）は、イタリアのレッジョ・エミリア市の視察研修（千葉市民間保育園協会主催 2014年11月）に参加した。そこでは、戦後70

年の歴史を持つレッジョ・エミリアアプローチ^{8) 9)}と呼ばれる子どもの個性や遊びの創造性を重視した保育が行われていた。その保育を中心的に支えていたのが素材庫であるアトリエの存在であり、市のすべての保育現場（幼児学校・乳児保育所）に設置されていた。

本研究者は、そこで行われているレミダという「創造的素材リサイクルセンター」の活動と保育現場にあるアトリエを見学して、素材の果たす役割を学び、また、子どもの表現活動を支えるために街をあげて素材の収集を行う活動を行っていることに感動した。アトリエは、レッジョ・エミリア市自治体の『幼児学校と乳児保育所指針』⁸⁾に「一個人としての子どもとすべての子どもの表現的可能性と創造性に価値を与える実験室として幼児保育者と幼児学校におけるセクション、ミニアトリエ、そして施設内の空間と対話し繋がる身体的場所である。」とあり、レッジョ・エミリアアプローチで中核的な役割を担っていることがわかる。

教育とアートを融合させたレッジョ・エミリアの実践の場である幼児学校のアトリエには、アトリエリスタ（美術専門家）という専門職が常駐しており、乳児保育所には定期的に担当している。この研修で「子どもたちの美しいアートは、これらの素材提供や専門家の支援なしには生まれない」と説明された。実際に見学して素材活用のシステム作りや専門家の支援の充実さに納得できるものがあつた。子ども達に素材を提供するためにアトリエリスタは、子どもたちの成果を見ながら、良い素材を提供するための研鑽や研修を行っている。このように素材を知り尽くした上で「子どもの遊び・保育環境・素材の役割」の取り組みがなされているのである。

レッジョ・エミリアの研修では、大人が協力して子どもの遊びを考えることに多くの示唆が得られたとともに、日本ではこれほどまでに幼児期の子どもの遊びの重要性が保護者を含めた社会に理解されていないという感想を持った。その意識の変化のためには、保育従事者らの不断の努力による証明が大切であり、課題であると実感した。

1.3 M幼稚園について

M幼稚園はインクルーシブ保育を目指し、障害の

ある子、気になる子、外国籍を持ち言葉や文化の違いがある子たちを含めた保育を実践している。しかし実際には、これまで毎年繰り返している保育内容を検証しないまま実践していたという印象はぬぐえない。そのために2015年度から、保育者たちが意識的に保育の質を高める機会となるように、遊びを中心とした保育についての園内研修を行い、インクルーシブ保育の実践報告^{5) 6) 7)}を行ってきた。さらに素材研究を行い、様々な発達段階にある個性を持った子ども達が自発的に遊びに取り組める「あとリエ」について話し合いを行っている。

1.4 M幼稚園の環境の見直し「あとリエ」作りから

レッジョ・エミリア市の長い歴史の中で培われ育まれたレッジョ・アプローチをそのまま日本の保育現場で行うことは難しいが、子ども達が自由に素材に触れ、遊びに活用できるよう様々な素材を用意し充実させることから始めた。1階中央の部屋を「あとリエ」（写真1）と名づけた。具体的には、空き部屋を利用して保育者が棚を準備し、素材や造形の道具の保管、陳列を行った。そこが制作、遊びの場、アイデアの部屋となり、子ども達が様々な素材に触れ、遊びや製作活動を自由に行うことができるよう環境を整えた。保護者の協力も得ながら素材を集め、保育者が、紙や牛乳パックの空き箱、ビーズ等を棚に整理することから始めた。



写真1 「あとリエ」で遊ぶ子どもたち

幼稚園の現状では、「あとリエ」担当者にアトリエリスタ（美術専門家）のような専門職を配置することが難しいため、保育の教材研究者である保育者が「あとリエ」を担当することにした。さらに、芸術面の指導者を充実させるために、レッジョ・エミリアの研修と一緒にいき、これまでも本研究園の造形教室担当であった外部教師に「あとリエ」の指導に関わってもらい、常駐とはいかないが園として実

現可能なことからスタートさせることにした。

1.5 M幼稚園での「子どもの遊び・保育環境・素材の役割」を中心とした保育の事例（エピソード記録）について

M幼稚園では、「あとりえ」の可能性を具体的に探るために、保育者による「子どもの遊び・保育環境・素材の役割」を中心とした保育記録を基に事例（以下、エピソード記録と記す）検討を行った。記録の取り方は、子どもへの対応から保育者が感動し、悩んだ出来事を中心に書き出していき、対象の子どもに焦点を置くことにした。普段保育者達が書いている日々の記録は、「保育のねらい」にそって子どもたちの様子を記載している。クラス全体の様子や保育の流れを把握するために有効的である。しかし、エピソード記録は、保育環境や素材設定を改善していくために子どもとの関わりや、主体的な遊びに向かう子どもの気持ちに焦点を合わせた記録となるようにした。

2. 研究の目的

「あとりえ」を中心とした保育者のエピソード記録から子どもの遊びを分析し、インクルーシブ保育のための「あとりえ」の効果を考察し、これからの保育の方向性を見いだす。

3. 方法

【調査場所】 千葉市内M幼稚園

【調査期間】 2016年4月～2016年9月

【調査方法の概要】 2016年度園内研修の資料⁷⁾をもとに、エピソード記録の有効性、「あとりえ」の有効性とインクルーシブ保育の可能性を中心に分析考察する。

【2016年度園内研修の資料】 M幼稚園では、2016年度から保育者全員が一人ずつエピソード記録とそれに付随した「保育者の思いと考察」を書いた。その記録を6月の園内研修で読み合わせ、話し合った結果を、2016年度園内研修の資料⁷⁾としてまとめた。本研究では、それらを「遊びの展開」「異年齢の遊び」「特別支援児を含む保育」の категорияに分け、そ

の中から、①5歳児の遊びの展開【仲間と広がるドラキュラごっこ】、②3歳、4歳、5歳の異年齢保育【リレーをしたいな・・・】、③4歳特別支援児の保育【ぼく、お化け屋敷に入ってみる】、の3件のエピソード記録を採用した。

4. 結果

4.1 5歳児の遊びと仲間の広がり【ドラキュラごっこ】のエピソード記録

5歳児のA児とB児は仲良しで、普段から2人だけで遊びに没頭して楽しむことが多い。年長になって3ヶ月経過したが、これまで他の仲間と一緒に遊ぶ姿はあまり見られない。

ある日、絵本『おばけやしきなんてこわくない』の視聴後、A児とB児は「あとりえ」から、マントや帽子を持ってきて「ドラキュラ」になりきって遊び始めた。それだけでは物足りなさを感じたのか、さらに2人で絵本をじっくり見て、「長い爪が必要かな」「血を吸う為には鋭い牙もいるね」「血を吸われた人がドラキュラになっていくから、首に吸われた痕もつけようよ」と相談し、色紙等を使って爪や牙を完成させた（写真2）。



写真2 ドラキュラの爪

さらに「ドラキュラの家も作らないと！」と、2人の想像は膨らんだ。その様子に引き込まれた周りの子ども達も、ドラキュラごっこの仲間に入り、多くの仲間と遊ぶようになった。

しばらく経ったある日、あれほど盛り上がったドラキュラごっこが朝から全く見られない。その日は、B児が欠席でA児が遅刻をしたのだった。「今日A君はまだ来てないの」と子どもは話していた。そこへようやくA児が登園してきた。A児は朝の支度をすると真っ先にドラキュラに変身した。その様子を見た子ども達も次々とドラキュラに変身していった。「A君はドラキュラの王様だ！」と1人の男の子が言った通り、A児を中心にドラキュラごっこが

さらに盛り上がった。

【保育者の思いと考察】

A児とB児は、以前は2人だけで遊びを楽しんでいたが、クラスの仲間を巻き込み、みんなで遊ぶことはあまりなかった。保育者は、クラスの仲間の輪が広がり、みんなで一緒に遊ぶことの楽しさを伝えたいと思い、クラスで絵本『おぼけやしきなんてこわくない』の読み聞かせを行い、子ども達と絵本の感想や意見を話し合った。5歳児は、おはなしのイメージを膨らませるのが早く、A児とB児は「あとリエ」で素材を調達し遊び始めた。2人の始めたドラキュラごっこが周りの友達に伝わり、クラスのみんなで遊びとなったのは、物語の共有が出来ていたことが大きな要因だったと考察する。また、2人がいないと楽しくないことにクラスの仲間たちが気づいたこと、A児B児のにとっては仲間期待されたことがきっかけとなりみんなで遊ぶことの楽しさを実感したようだ。

5歳児にとって、仲間が自分の遊びや意見に賛同したり一緒に楽しんだりする経験が、自信や喜びとなり、また、友達との信頼関係を築くことにも繋がった。

また、ドラキュラの「爪」や「牙」での変装(写真1)や「家」作りが出来たのは「あとリエ」に、子ども達が自由に使える素材があり、遊びのヒントが得られたのであろう。子ども達にとって「あとリエ」は、自由に材料を出してさまざまな遊びを作り出せるような拠点であり、そこに行けば、自分の遊びのヒントになる物があることは魅力的であり、それを使って新たなアイデアを生み出し、遊びを展開させることが出来た。「あとリエ」の多様な素材が、子ども達に面白い活動を発想し、発展させる場を提供したと考える。

4.2 3歳、4歳、5歳の異年齢保育【リレーをしたいな・・・】のエピソード記録

年中女児2人が、年長のリレーの練習を見ていた。2人が、「リレーをしたい」と、バトンの代わりとなる輪投げを「あとリエ」に取りに行った。保育者が「2人ではできないね、どうしようか」と声をかけると、2人は周りの様子を見て同じクラスの友達を誘い始めたが、すぐに断られてしまったようだ。すると、リレーに関心が高くなっている年長男児3人が「じゃ

あ、やる！」とリレーに参加してくれた。

2チームに分かれたが、今度は1人足りないことに気づいた。年長児3人がそれぞれ友達を誘いに行き、さらに4人が参加することになった。しかし、9人でもやはり1人足りない。そこへ年少3歳男児が「何やっているの？僕もやりたい！」とやってきた。1人足りないことは解決したが、年長児たちは、小さな3歳児に「出来るかな」という不安を持ったようだ。年中女児2人は、やっとリレーが出来ることで満足し笑顔になっていた。しかし年長児は自分たちのグループが勝つためには、年中少児にリレーのこつを教えなくてはいけないことに気づいた。そこでボックスの入り方や体の向きバトンの受け取り方を教えたのである。年中児も年長の勝敗への意欲に刺激を受け、年長児の真似をして一生懸命走っていた。この後、園庭では、異年齢構成でのリレーを何度も繰り返し楽しむ姿が見られた(写真3)。



写真3 異年齢のリレーごっこ

【保育者の思いと考察】

保育者は、子ども達の思いを大切にしながら、子ども達が主体的に遊べるようにという願いを持っていた。年中女児2人は、リレーをしたいが自分たちだけでは出来ずにいた。年長児は、リレーを経験しているので、年中・少児にルールを教える姿が見られた。保育者は補佐役に控えて、年長児主体の遊びに代わっていった。年少児が参加しても子どもたちが自分たちで考え、助け合った結果、リレーが成立していった。

運動会に向かって年長児のリレーの練習では、同年齢の仲間と行っているが、年長児が年齢の低い子にルールを教えることは新鮮な体験であり、さらに自分たちにとってもやる気となったようだ。年中児も年長児にあこがれて「やってみたい」という思いになり、さらに年少児は雰囲気を楽しむ、という発達段階に応じた参加が出来、異年齢の子どもたちで力を合わせるリレーとなった。その中で自分より小さい子に優しくしたり、教えたりする異年齢の関わりや年長児を中心に自分たちで相談しながら主体的

に遊びを進めていく姿が見られた。リレーのバトンは年長児が優先的に使っているため、バトンの代わりに、「あとリエ」の輪投げを活用し使い方を工夫していたことが、異年齢の子どもたちの遊びが活発になるきっかけとなった。

4.3 4歳特別支援児を含む保育【ぼく、お化け屋敷に入ってみる】のエピソード記録

C児は、入園前から言葉に遅れがあり、現在も療育センターに通所している。初めての場所や人が苦手なため、今まで担任の側から離れられないことが多かった。年中になったC児は、言葉が増え保育者との会話を楽しむようになったが、自分から「あとリエ」に入っていくことはなかった。

6月に入ると年長児のドラキュラごっこの影響から、園全体がお化け作りを盛んに行うようになっていた。保育者は、さらにお化け屋敷のイメージが共有出来るように「あとリエ」を暗くして黒い紙や紙コップ等の材料を用意した。

「あとリエ」には、異年齢の子ども達が集まってきた。「こうもり」や「骸骨」などのお化けを作り、それを天井からつるし(写真4)、揺れる様子を喜ぶ姿が見られ、園全体で夕涼み会の話や、お祭りの出店ごっこで遊ぶ様子が見られるようになっていた。

昨年C児は、夕涼み会では、お化け屋敷の暗闇を怖がり、その影響からか暗い「あとリエ」の中に入ることを躊躇していた。しかし、今年は、みんなが楽しんでいる様子を眺め、少しずつお化けに興味をもった様子であった。ある日、C児が自分から「あとリエ」に入ってきて、「お化けを作りたい」と言った。みんなの真似をし、手伝ってもらい作ることが出来たお化けを「上に飾って!」と言うことができた。「あとリエ」の天井に、みんなと一緒に一緒のお化けの作品を飾ると、とてもうれしそうにして、隣で違うお化けを作っている友達に「何を作っているの」と聞くことができた。



写真4 天井につるしたお化け

【保育者の思いと考察】

C児は、保育者に手を引かれて「あとリエ」に入るのではなく、自分の意思で入室し遊びに参加することが出来た。自発的に遊びに参加できたことが自信に繋がったように思う。6月になって保育者や友達とのコミュニケーションも増え、夢中で遊ぶ姿が見られるようになってきた。その後、所持品始末をスムーズに終えた。

次の日にも「あとリエ」で遊ぶようになったのは、「あとリエ」には、「変わったものがある」「興味が沸くものがある」ことから、自分から「あとリエ」に入るきっかけとなったと思う。C児にとって「あとリエ」がとても心を動かす、みんなと遊べる場所となった。子どもの興味を引きそうな素材を保育者が気づき即座に配置したこと、そのことがC児の気持ちにも変化を与えることができたことが、エピソード記録に記したことで分かった。

5. 考察

5.1 「あとリエ」の有効性

「あとリエ」の有効性は、まず子どもたちにとって素材がいつでも自由に使えるということだろう。5歳児の遊びの中で「あとリエ」は、自由に好きな材料を出して、さまざまな遊びを生み出す拠点となっていた。「あとリエ」に行けば、自分の遊びのヒントになる物があると子どもたちは、思うようになった。新たなアイデアを生み出し、遊びを展開させる要因となった。

保育の場に、多くの素材があるだけでなく、素材をいつでも自由に使えることは、子ども達の遊びの展開が豊かになることを意味する。保育は、子どもの個性に合った、子どもが扱える様々な素材が重要な鍵となる。それは、幼稚園教育要領や保育所保育指針の第1章総則が示すように、「保育は環境を通して行う」ものであるとすれば、子どもが健やかに育成される環境を作ることが大切ということである。エピソード記録によって素材が保育の環境を構成する大切な要素となることが実証されたとと言える。

自由に遊ぶ中で「あとリエ」の素材を子ども自身が選んで取り出し、使い方を工夫していくことが、異年

年齢の子どもたちの遊びを活発にするきっかけとなったことも検証された。また、子ども達が熱心に遊ぶ「あとリエ」の醸し出す雰囲気を見た特別支援児が影響されて、自分から「やってみたい」と意欲を示すようになった。「あとリエ」の素材が、様々な発達段階にある個性を持った子ども達が自発的に取り組める遊びのきっかけとなった。「あとリエ」は、一人ひとりの特性を伸ばす場となり、みんなが自分の力を発揮し生き生きと遊べる場所となったのである。

5.2 エピソード記録の活用の有効性

エピソード記録は、対象の子どもたちの活動に焦点を合わせたものであり、その記録を保育者が活用することで、普段何気なく見過ごしてしまうような事柄への気づきを促すことが出来た。それは、保育を深く考察するための手段であり、子ども理解を深めるのに役だった。さらに、その読み合わせを保育者全員で行い、現在の子どもの姿を共有し、今必要な素材を把握したことでお化けの環境等、さらに保育者同士の共通理解が促され、子どもたちのための最善の利益を目指して環境を変化させていくことが出来ようになったと言えるであろう。

エピソード記録の分析という今回の取り組みは、保育者が、子ども一人ひとりの表面的な事象を追うだけでなく、環境と子どもとの関連性を深く理解する上で、役立つと言える。これからも、エピソード記録を保育者間で共有するだけでなく、さらに子ども自身や保護者に示していくことも必要であろう。

5.3 インクルーシブ保育の可能性

倉橋の誘導保育論による、幼児の子どもらしいありのままの生活を尊重して、「生活を、生活で、生活へ」と導き、自己充実するように誘導することが幼児保育の基本であるとする、まさにその実践の方法として「あとリエ」は有効であると言えるであろう。幼児中心主義の保育論が「さながらの生活」⁴⁾であるとする、「あとリエ」では、どの子ども「子どもらしく十分に生活できる」ことや、子どもが自由な雰囲気を十分に味わうことができる「自由・設備」に近づくことが出来たと言えるであろう。

さらにエピソード記録の活用は、この「自由・設備」を保障し、どの子ども満足できる遊び「自己充実」を

検証する方法として有効であったと言えるだろう。「あとリエ」の素材が遊びの刺激剤として、子どもの自発性を揺り動かし、子どものやる気に繋がり自由な雰囲気を十分に味わうことが出来る場を作ったということは、「自由・設備」が整った場を作ったということであり、インクルーシブ保育の場に近づいたことと言える。「多様な素材が活用できる環境作り」をすることで、どの子ども何らかの遊びに興味を持ち、主体的に遊べる活動を生み出したことは、インクルーシブ保育の形成に役だったといえる。

6. まとめ

本研究から、子どもたちのために大人が「あとリエ」を支えていく取り組みによって、その活動を通じて大人同士も交流を深めていけるであろうという考えに至った。それは、の森真理の著書『レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある乳幼児教育～』⁹⁾の中でも、触れられている。つまり通常の不要品や廃物を生かして資源として再利用し、循環型社会をめざすといった通常のリサイクルセンターとは違い、「レミダは、コミュニケーションと創造性を豊かにする文化プロジェクト」と位置づけられているのである。さらに「まさにレッジョ・エミリアアプローチの思想に基づき、子どもたちのために素材を活用した人の交流プロジェクトである。」と記している。M幼稚園の保育者や保護者も、子どもの喜びに誘発されて素材を集め、整理する等、子どもたちのために自分たちの方向性を見いだしている。

「あとリエ」によって、どの子ども、遊びのイメージを具体化させることができ、活発に活動できるようになった。たくさんの素材を配置した「あとリエ」は、子どもの心を引きつける要素が沢山ある場である。インクルーシブ保育のために、どの子どもにも適した素材を提供していくことがさらに必要と分かった。子どもたちが素材を活用し、お互いに交流できるようにすることが、大人の大切な役割である。このような観点から今後、「あとリエ」の実践について、さらに研究を行っていきたい。

倫理的配慮

本研究に用いた記録用紙（保育者用）等，個人が特定できないように配慮した。また記録用紙を分析・資料として活用することは事前にM幼稚園，関係者にご了承いただいた。

文献

- 1) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領，2014
- 2) 文部科学省，幼稚園教育要領，2017年告示
- 3) 厚生労働省，改訂版保育所保育指針，2017年告示
- 4) 倉橋惣三，幼稚園真諦，フレーベル館，2008
- 5) 植草一世，大学附属幼稚園における保育の質を高めるための取り組み－子どもの遊びを活性化させるための素材活用－（単著），植草学園大学紀要 Vol. 8，2015
- 6) 植草一世，安藤則夫，馬場彩果，他5名，子どもの遊びを活性化させるための素材庫（アトリエ）の可能性（共著），植草学園大学紀要 Vol. 9，2017
- 7) こどもの遊び・保育環境・素材の役割－エピソード記録から－（共著），植草一世，植草和典，萩生田明，他9名，千葉市幼稚園協会紀要 Vol. 37，2017
- 8) レッジョ・エミリア市自治体の乳児保育所と幼児施設，翻訳，森眞理，REGOLAMENTO SCUOLE E NDI D'INFANZIA del Comune di Reggio Emilia（レッジョ・エミリア市自治体の幼児学校と乳児保育所の指針）2014初版
- 9) レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある乳幼児教育～，森眞理，フレーベル館，2013
- 10) 秋田喜代美，子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材のあり方，公益財団法人日本教材文化研究財団，2016

Abstract

A Storehouse “Atelier” for Inclusive Child Care: Consideration Based on Episodic Records of Children’s Play

Kazuho UEKUSA^[1], Norio ANDO^[2]

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University, Mihama University-affiliated Certified Center for Early Childhood Education and Care,

[2] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

In reference to the activities at Reggio Emilia in Italy where all of the townspeople gather materials for their children, we made a storehouse of materials in M kindergarten in Chiba City. The storehouse (atelier) has many functions such as safekeeping, display and offering the place for playing. In order to confirm the result of our activities, teachers recorded the children’s play activities facilitated by materials of the storehouse based on the episodes of each child. Teachers also discussed the episodic records in order to fix the direction of children’s future play activities. As a result of examination, we understood that the variety of materials of the atelier had many influences on children as a way of spurring their play. Surrounded by a variety of material, every child no matter his/her condition can be inspired to play, carry out their favorite play activity and involve other children in his/her play. We judged such pleasant activities elicited by the atelier to be the goal for inclusive child care.

Keywords: A storehouse of materials (Atelier), Episodic records, Teachers’ discussion, Inclusive Child Care